



「またやった」

ソファに横たわったまま目を開けた男は悔やんだ。

部屋の蛍光灯とテレビがつけっぱなし。

目線より上に見えるパソコンも直ぐに働ける状態。

デスクの上は今朝のままだ。

軽やかに立ち上がった男は、すぐに時間を気にした。

急に立ち上がったせいなのか、心臓からのクレーム。

目覚めの動悸が激しかった。

左胸に何かが入り込んだみたいないな感じだ。

男は別の生き物によって次第に覚醒し、開けっ放しの窓にも気づいた。

約束をしていなかった太陽は、待っていていなかった。

夜の8時過ぎ。

いつも流しているTV番組のオープニングが聴こえてくる。

「急ご」

男は慌ただしく着替えを終えた。

そして窓を閉めて、ロックを掛けた。

二回確かめて、カーテンだけ開けておいた。

つけっぱなしだった奴らも片っ端から眠らせて、とどめにコンセントから引き離した。

いつものように神経質。

あとは部屋の灯りを消すだけ。

そうやって男はようやく安心した。

休日なのにどうしても繰り返す出勤前のパターン。

時計にばかり目がいく。

掛け時計に目覚まし時計、最後に見るのは携帯電話。

まだ間に合うことを確認すると、蛍光灯から垂れる紐に手を伸ばした。

一回引く。

二本消えた。

同時に窓の向こうの街の灯りもいくつか消えたような気がした。

二回目。

消灯。

気づけば外も同じ。

街の夜景も消えていた。

文明の灯りというものが見あたらない。

これは偶然なのだろうか。

部屋の灯りを消すのと同時に停電なんて。

たぶん、そうだろうと男は思った。

深く考える余裕はない。

携帯電話の頼りない光を懐中電灯代わりにして、男は部屋を出た。

マンションの通路も沈黙していた。

聞こえるはずの音楽も止まっている。

非常灯も点いてない。

「おかしいな」と思いながら、エレベーターではなく非常階段へ向かった。

幸い月明かりが吹き抜けに下りていて、なんとか視界がある。

四角い夜空に雲は見あたらず、男は「満月かな」と思った。

扉を開け、ゆっくりと階段を下りた。

転げ落ちないように気をつけながら足下を探る。

ようやく一階にたどり着くと、男は走り出した。

今夜は大事な約束があった。

頼みの月は少し欠けていて、ぼんやり浮かんでいた。

信号でさえ消えていて、やはり街全体が停電しているようだった。

建物は闇にそびえる絶壁の山となり、舗道はいつもより危うい様相。

なぜか通る人もいなければ、車も走ってこない。

風は巢に戻ったかのように気配が無い。

自販機も眠るように目を閉じていて、なんとも寂しい。

男は田舎の通学路を思い出していた。

夏、カエルやヘビを踏まないように気をつけたっけ。

夜道ならなおさらで、車で通る時ですら慎重だった。

停滞する湿った空気に邪魔されながら走る男。

時々歩いて、月を見上げる。

どこまで行っても街は死んでいるみたいだった。

いつもの大声や奇声が繁華街から響いてこない。

通り過ぎるヘッドライトも無いから、ゆっくり車道を横切る。

横断歩道の真ん中で止まって、振り返ることもできた。

そんな寄り道をしながら、待ち合わせの場所へと近づいた。 ～続く